

ではないかと推定されるが、前記の会寧付近へのソ連軍の侵攻が最も至近のソ連軍侵攻の体験であったと思われる。

筆者らは、ソ連との交戦を知ると、早くも南下を開始し、十月二日頃、帰還列車に食糧などを積み、無事釜山駅に到着している。

終戦後、ソ連支配地区としての北朝鮮からの引き揚げた人数を見ると、次のようになっていく。

陸軍軍人	二五、一五一	人
海軍軍人	二三六	人
民間人	二九七、一五九	人
計	三二二、五四六	人

総計約三十二万人を数えるが、この北朝鮮からの引揚者の九一％は、ソ連の送還開始前に、苦難を重ねつつ陸路三十八度線を突破して、南朝鮮地区に脱出してきた人びとである、との記録がある。

## 北朝鮮より比島の想い出

福島県 田 沢 精 司

昭和十六（一九四一）年五月に徴兵検査にて甲種合格となり、羅南の山砲兵に入隊のため十二月八日出発することになっておりました。前夜に、大勢の方々に武運長久のお祝をして戴き、翌八日の朝出発することになっておりました。これまでは駅まで大勢の方々に見送られるのが慣例でしたが、この日の黎明、日本海軍の真珠湾の奇襲攻撃によって大東亜戦争が開始されたので、見送りはできなくなつたそうです。そのため家からは親族代表一人、部落からも一人ということで、喜多方駅まで送られました。

郡山駅前には午後一時集合となっていたので、時間までには全員集合しました。そして朝鮮・羅南の山砲隊より指揮官が来郡され、その命令指示に従い郡山駅前通りの旅館に一泊となり、そこで

種々の教育を受け、午後九時就寝しました。

翌朝六時起床、人員の掌握(点呼)を受け朝食、旅館を後にして郡山発の列車に乗りました。行先は広島県の宇品港で、夜到着し指定旅館に宿泊しました。

十二月十日、起床、点呼、朝食、直ちに引率されて、小学校に入り、いよいよ軍人としての身支度を着装して精神訓話、徒歩訓練と教練など徹底的な教育を受けて、そこに二週間滞在しました。

いよいよ羅南に行くため宇品港を出発、瀬戸内海を通過し玄界灘の荒波にもまれ、釜山港に入港、釜山駅より汽車にて北朝鮮清津府羅南第十九師団山砲第二十五連隊に到着しました。

当初の所属は山砲兵第一大隊第三中隊補充隊で、観測班に配属されているの教育を受け、戦場に行くまでの約三年近く、この羅南で過ごしました。その間初年兵の教育にも徹底的に努力しました。

昭和十九年十一月十六日、軍令に依り動員下令、これによって大異動となり、大隊本部も新しい人事の構成となり、編成も変わり、今まで観測班の助手であった私も、この大編成によって大隊本部観測係乙下士官となりました。新しい本部の編成により新品の兵器、駄乗馬用品も新品となり、勇壮なる部隊編成となりました。

山砲兵第二十五連隊第一大隊は昭和十九年十一月二十六日、突然出動下令、命令によれば比島方面へ十二月一日の出発予定とのことでした。当日の羅南は珍しく積雪に覆われ真っ白でした。

ちようどこの頃は、米軍は南方方面の爆撃に注力しており、中国大陸方面はしばらく手薄であったため、非常に助かったと喜んだのですが、米軍四十機は支那大陸にあつて我が船団の攻撃のため待機中との情報に接しました。この攻撃を避けるため、船団は島陰に回避しながら様子を伺っていました。

バシー海峡は世界一波の高い所で、艦は木の葉

のごとく揺れ、船酔いする者が続出して大変でした。これまでの船団は、この場所で大きな被害を受けたと聞きます。我が船団もこんなところで攻撃を受ければほとんど全滅だと思いました。十二月二十三日早朝、この時「敵潜艦現わる」との連絡があり、船からは爆雷を海中に投下し、その振動が伝わって来ました。

その後、警戒しながらも船団は無事にバシー海峡を通過して、十二月二十六日、ルソン島西岸のリンガエン湾内北サンフェルナンドに入港しました。夕方近くのため夕日の海岸を眺めつつまずは安心と思っていました。そしてちよつと早目の夕食との連絡があり、甲板に集まり始めますと、周囲の低い山の谷間から低空で、敵の戦闘機二機が機銃掃射をやりながら帰っていっただけで、我が方には全く被害はなかったのです。しかし危険であるため上陸用舟艇により、夜を徹して揚陸作戦を開始しました。

次の日は朝早く米軍の戦闘機による空襲が始ま

りましたが、今までは米軍の攻撃が全然なかったのが我が船団は幸運にも助かったのです。これ以後、敵の戦闘機は毎日何回となく攻撃に来るようになりました。

十二月二十九日夕刻、虎兵団の主力が船団「青葉丸」ほか五隻で入港とのことであったため、同時には危険なため、急いで揚陸作業開始しました。間もなく米軍機の攻撃を受けて弾薬等に引火炎上、このため弾薬、糧秣、馬匹ほとんど全滅、沈没しました。同船には山砲の連隊本部、第二大隊本部、第七、八、九中隊が乗船していましたが、全員海に飛び込み隊員は助かりました。

山砲大隊本部の大隊長は斉藤善造少佐であり、北サンフェルナンドに上陸当時は、付近に敵の攻撃が全くなかったため、昭和二十年一月五日には、お正月を祝うこととなりました。皆も安心して準備にかかり、まずドラム缶に風呂を沸かし、入浴して身を清め、お酒を飲みながら話をして楽しく

休むことができませんでした。北フェルナンドは海に近く、マニラ街道またバナオ街道にも近い所で良い場所でありました。

風の便りによればマツカーサー部隊は、豪州のシドニーより態勢を整えて比島に反攻を仕掛けるという話は聞いていましたが、昭和二十年一月六日早朝、それが本当になり、リングエン湾の海上方面より、艦砲射撃、戦闘機による機銃掃射が開始されました。その攻撃も海岸よりのため、一日中休むことない連続攻撃であったために、我が軍は山に移動して、ある程度安全な場所を見つけるのには大変難儀しました。

そこを陣地として使用することにしましたが、一面林で、特に松林は太い大木です。そしてそこは標高が千メートル近くと思われる高さで、そこから海面を眺めるとリングエン海上の艦船数は百隻以上に見える。たまに我が軍の飛行機が近寄ると船団上空に弾幕を張り、また夜間は洗々と照明し昼間のごとく、夜通しの揚陸作業を望むのでし

たが、どうすることもできません。

我が空軍の飛行機も数が少ないため二機位でたまに飛来するが、それが攻撃を受けて敵の艦船に体当たりするのを見ることもできました。

日本軍の陸揚げした食糧、弾薬、その他は全部比島正規軍に略奪され、我が軍は制空、制海権を失い、食糧、弾薬に不自由となり、敵の攻撃を受けても弾が、また食糧もなく微発しようとも何もない。いよいよ決心して切り込み隊を結成して敵の陣地を目標に活動するしか道がなくなりました。

だんだん追い詰められ、移動するにも標高千メートル以上の高地に入るようになれば状態は皆同じになり、さらに食糧には窮しました。バナオを通過して九十キロ地点も、標高二千メートルに近くなります。

戦場では弾がないよりも食糧のないのには本当に困り、一番恐ろしいのは栄養失調です。それに Deng 熱、マラリア等になり身体の調子が悪くなると日を追ってだんだん衰弱が進み、一人で岩に

腰を降ろして休んでいるうちに衰弱も進行し、葉もない手当することもできないためそのまま最期となる。非常に残念なことでした。

このような状態の中、昭和二十年八月十五日、今まで昼夜の敵の攻撃が激しかったのが発砲がなくなりました。なんとなく変に思っていたところが、午後、向かいの高い山よりスピーカーにて放送があり、「日本は戦争に負けた。武装解除するから北部ルソン島のバニオ街に集結のこと」との連絡でした。

放送に従うために全陣地を整理してバニオ街に集結し、武装解除され、指揮官に指示を受け、マニラに行くためトロッコを大きくしたような屋根のない車に乗せられ駅を出発しました。途中で住民の反抗により石、木材等を投げつけられて大変危険でした。時間が経過してマニラに到着、下車して比島軍の引率で徒歩で現地に到着しました。

見渡すと広大な土地にパーク舎（テント張）何千舎、ここに捕虜を收容するのでしょう。パーク

舎の割り当てを始める前に、この場所の最高責任者はミッテン・ドルフ大尉（米兵）であることを報告されました。パーク舎の割り当ては一カ所二十人で、二三日経って三分一位の人員を入れ替えました。このことは日本軍人は団結して反抗する危険があることを恐れたのでしよう。

真面目に生活するよう指示を受け、実行すれば成績の良い順に日本に帰国させるということが伝わって来ました。日本に帰れることになればと、皆本気で努力すれば結局結果が良く、帰国の話が伝わり、皆喜び合いながら活動しておりましたところ、何日も経たないうちに帰国の命令が発せられ、日時、場所等が判りました。

帰国と言っても自分の荷物は何一つなく、着のみ着のまま、服装は古くて大きい靴、元軍人の面影は何一つない姿で引率されてマニラ港に到着しました。

乗る船は海防艦で、日本海軍軍人の指揮により乗船して出発、九州の鹿児島県加治木港に到着し

ました。

上陸して報告し、下士官なので二百円戴いて汽車に乗り、郡山駅まで六人、郡山より私一人になりました。私は時間的に夕方家に着くようにしようと思ひ、会津若松駅で下車し、親類の家に立ち寄り、時間を見計らって帰ることにしました。

喜多方駅にて下車し、徒歩にて約四キロ位の距離を途中五回も休みようやく家に着きました。家の玄関にて「只今、帰りました」と小声で声をかけると、家族は服装を見て、瞬間ガツカリしたでしょうが、顔を見て息子だと判り、喜び安心して急に大声になりました。

約一年近く白米のご飯を食べていないため、その時の夕食は非常においしく、感謝して食べました。

帰宅しても栄養失調のため、早く元気になろうと、春の彼岸まで休養したため健康は回復し、その後は本気で働くことができるようになりました。有難うございました。

## 【解 設】

体験記筆者は、昭和十六年五月、内地で入隊して直ちに現地に出発、釜山駅より北朝鮮清津府羅南にあつた第十九師団山砲第二十五連隊に到着した。第十九師団は歩兵第七十三〜七十六の四個連隊を基幹に編成されていた。

筆者は山砲兵第一大隊第三中隊補充隊で、観測班に配属され、約三年近くを、この羅南の部隊で過ごした。

しかし昭和十九年十一月二十六日突然、第十九師団に出動が下令され、山砲兵第二十五連隊も十二月一日に比島方面へ出発となった。

この頃は、南方への輸送船は、敵潜、敵航空機の攻撃を避けるため、船団は島陰に退避しながらの航海であり、またバシー海峡は世界一波が高く、敵潜水艦の跋扈する魔の海峡であつた。

筆者の記録によれば、山砲第二十五連隊は比島の北サンフェルナンドに上陸、昭和二十年の一月五日ころには、まだ敵の攻撃もなく、正月

を祝うという状況で、ドラム缶風呂に入り、酒を飲み、北フェルナンドからマニラ街道の海岸の美景を満喫していたという。

ところが翌一月六日早朝、米軍は反攻を開始、リングエン湾の海上より、艦砲射撃、飛行機による爆撃などが開始された。

このリングエン湾の戦闘について、山下奉文第十四方面軍司令官は、一月六日、次のような命令を下達している。

○ 第十九師団は、上陸してくる敵を海岸近くの要域において撃砕すべし。

○ 第二十三師団（独混第五十八旅団など）は、リングエン湾正面の敵に対し、海岸近くの陣地を堅固に守備し、同陣地に抛り敵を撃砕すべし。

しかし、この命令の下達された日は、敵は艦砲射撃を開始し、リングエン湾岸に配備された部隊、集積された軍需物資に対して、一月八日

に至るまで連続の猛爆を加えている。

比島に転用された第十九師団の主力は方面軍司令官山下奉文直属の尚武集団に属して、前記のリングエン湾北部の北フェルナンド地区の防衛を担当し、米軍の激撃に当たっている。

しかし、圧倒的な米軍に撃退され、遂に北部の山岳地帯にこもって持久戦を展開中に終戦を迎えた。

この時の状況を筆者は次のように記述している。

『だんだん追い詰められ、移動するにも標高千メートル以上の高地に入るようになれば状態は皆同じになり、さらに食糧には窮しました。』

バナオを通過して九十キロ地点も、標高二千メートルに近くなります。

戦場では弾がないよりも食糧のないのには本当に困り、一番恐ろしいのは栄養失調です。それに Dengue 熱、マラリア等になり身体の調子が

悪くなると日を追ってだんだん衰弱が進み、葉もない手当することもできないため、そのまま最期となる』。

こうして山砲兵部隊は歩兵戦闘を強いられ、八月十五日の午後、米軍への降伏となって、以後の生活から復員の状況までを記録している。